



2011. 11 vol.14

SEASON



特集

全学読書運動（SBW）… 2

Soka Reading Project (SRP) … 4

SRP メンバーが選ぶ秋のおすすめ8冊 … 6

教員連載 第2回（全4回）

時代を担う学生に贈る 佐々木 諭 准教授『世界を知り、人間を磨く ― 留学の挑戦』… 8

図書館からのお知らせ … 10

ISSN 1349-3760

全学読書運動

SBWとは

全学読書運動のSoka Book Wave (SBW)とは創立者が提唱される「活字文化復興」を実現するため、創価大学・短大から「読書の波」を起こそうとの学生の熱意で、2004年から始まった本学独自の全学読書運動です。

参加者はPCか携帯からエントリーを行い、感想文や、書評を提出していき、それに対応したポイントがもらえます。このポイントが5ポイント貯まるごとに500円分の図書カードを進呈しており、最大で



6000円分まで取得することが出来ます。また31冊目からは、自動的に「楽しく読書コース」から「力をつける読書コース」にかわり、あらかじめ設定された本のレビューまたは、書評を提出することになります。

提出された感想文の量も2004年当初より増加しており、最も多い年の感想文の提出量は1万にも達し、多くの学生に参加をしていただきました。

提出された感想文は、SBWが図書館のHPの「感想文一覧」から見る事ができます。更に2009年度からは、図書館蔵書検索画面の検索結果詳細画面でも感想文やショートレビューが読めるようになりました。

SBWの歴史

SBWの歴史は2004年までさかのぼります。

当時、図書館で開催した「読書マラソン」のほか、男子寮の「読書杯」、学友会の「読書カップ」など各団体が読書運動を展開していましたが、それぞれが独自に行っており、連動していませんでした。

翌2005年に入りSBWとして正式にスタート。学寮の「読書杯」や、学友会の「読書カップ」、図書館の「読書マラソン」をできる限り統合。「チーム対抗部門」、「感動フリース部門」、「読書マラソン部門」、「ロングエッセー部門」などの部門に分けて行いました。

その後、各団体との連携を強化しつつ、感想文の提出をWEBにするなど、参加者に使いやすい形へと変化を続けてきました。

また、「SBW推薦図書」の設置や、レベルアップのための「読書力認定制度」、CEL (Center for Excellence in Teaching and Learning)との共催で「文章読解」「文章力アップ」講座の開催など、単に本を読むための運動から、文章を書くことに慣れる運動へと発展しております。

その他にも、学外読書展として八王子学園都市センターで読書展を開催するなど、学内のみに留まらず、幅広く活動を行ってきました。

2011年からは感想文の提出だけではなく、これらの講座等に参加してもポイントを得ることが出来るようになりました。

選書ツアー

選書ツアーとは、図書館で所蔵してほしい本を、実際に書店に行き、選ぶという試みです。本年6月に第3回の選書ツアーが新宿にある紀伊国屋書店新宿南店で行われました。

参加した学生からは「あんなに隅々まで本屋さんを回ったことがなく、とても楽しかった」「自分が選んだ本が図書館に入ることは少しでも大学に貢献できるのでやりがいがあった」などの声がよせられました。



紀伊国屋書店にて選書の説明を受ける学生

特別講座

年に数回、講師を招いて読書や本の内容などについて特別講座を行っていきます。

本学の加賀譲治副学長補による「文豪トルストイ『復活』読書への誘い」や、



特別講座を真剣に聞く学生たち

作家の村上雅彦先生による「いまさら聞けない三国志」などを開催しました。

また、2008年に100万人を動員した「大三国志展」を監修された満田剛先生による「東洋の神秘」誰も知らない三国志」など、内外問わず様々な方による講座が開催されました。

読書展

創大祭期間中、図書館内では読書展を行っています。例年多くの方々にご来場を頂いています。この読書展はSoka Reading Project (SRP)を中心とした学生の有志を中心に準備を行い、当日の運営も学生主体で行っています。

本年開催された読書展では「原点回帰」なぜ本を読むのか」をテーマに、延べ2千人の方にご来場いただきました。図書館1階ではパネル展示を行い、2階では「Soka Cafe」として、創立者の芸術家としての一面に着目した内容を展示しました。



本年開催された読書展での Soka cafe の様子

Soka Reading Project

本学には創立者が提唱される「活字文化の復興」を目指して活動するSoka Reading Project(SRP)という学生の団体があります。今回、創大祭にむけて準備が始まりつつあるSRPについて取材を行いました。

SRPについて

「創立者の提唱される『活字文化の復興』との指針をもとに、創大生の読書を推進していく団体です」と、真剣なまなざしで述べるのは寒川文江さん(経済学部3年)。彼女は現在SRPメンバーの総括として、忙しい時間をやりくりしながら活動を行っています。

学生有志の集まりであるSRPは、現在、図書館の2階にあるSRPルームを拠点として活動しています。「メンバーは総勢23人です。週に1度のミーティングを行ったり、読書会などの準備を行ったりしています」(寒川さん)SRPは今年の前期、全学読書運動であるSoka Book Wave (S



SRP総括
寒川文江さん(3年)
BWの参加者を対象に公開読書会を行い、後期には講演会を中心に活動をしていく予定です。

日々の活動

記者の取材中も、続々とメンバーが集まり、今後の活動についてのミーティングが行われました。普段は読書会などについて話し合いますが、目下の課題は創大祭で行う読書展でした。

副総括の横山英子さん(経済学部2年)に読書展に向けての決意を聞くと「それぞれ忙しく、中心となつて活動できるメンバーが少ないのですが、今までにない新しい形の読書展にしていきたいと思います」と答えてくれました。

この読書展は、創大祭が行われた10月の9、10日の2日間に渡り中央図書館で行われ、多くの来場者が訪れ、大盛況のうちに終了しました。

きっかけ

寒川さんは1年生のときに友達に誘われたのがきっかけでSRPの活動に参加するようになったそうです。

「それまでは、部活などもやっていませんでしたし、高校のときから本を読んでいたの、やってみようと思いました」(寒川さん)

楽しそうに語る寒川さんですが、大変なこともあり、特に1年の終りに行った講演会は印象深かったそうです。

当時の1年生を中心にやるうという方針のもと、寒川さんは副キャップとして活動しました。「全体の打ち合わせの運営や、講演される方への対応など様々な経験を、あの講演会で積ませていただきました」(寒川さん)



SRP副総括
横山英子さん(2年)

「今までは長編小説を読むことが多

く、

には様々な本があります。

創立者の著作はもちろんですが、それにとどまらず様々な本についても、どんどん挑戦していったきたいと思っています」(寒川さん)

「私の好きな言葉に『本を一冊読むことは、その中の登場人物と対話することだ』という言葉があります。

創価大学は読書をする最高の環境だと思います。この環境の中で読書をしたくことはとてももったいないことだと思います。

どんどん挑戦してもらいたいと思います」(横山さん)

初めての参加

記者が取材に行った日は初めて来たメンバーが2人ほどいました。彼らに何故SRPに参加してみようと思ったのか聞いてみたところ、次のように答えてくれました。

「先輩から教えて頂いたのがきっかけです。もし自分に何かできることがあるなら何でもやらせて頂こうと思い、見学に来ました」

「SBWから展示役員の募集のメールが来て興味がありました。

役員は当日の場内整理などだったのでありますが、内容についても参加し



読書展に向けて学生主体で真剣に話し合うSRPメンバー

読書展に向けて

読書展に向けてSRPメンバーにその決意を語ってもらいました。

「今までの色々な歩みがありますが、今一度創立者に立ち戻るような内容にしたいと思っています」

「僕は読書が苦手でしたので、これから挑戦したいと思っています。創大祭でも有志や部活などのかけもちがあり、とても忙しいのですが、SRPで触発を受けながら、頑張っていきたいと思っています」

「読書の楽しさを知ってもらいたいし、その楽しさを伝えたいと思っています」

創大生へ

最後に創大生に対して、メッセージをお願いします。

「読書という難しいイメージがありますが、そんなことはありません。世の中



SRPのメンバーと共に、読書展の大成功を目指して一致団結して活動中。

SRPメンバーが選ぶ



図書館戦争

有川浩【著】徒花スクモ【イラストレーター】 アスキー・メディアワークス

舞台は「人権を侵害する表現を取り締まるため」の検閲が法律で認められ、検閲時には武力行使さえ許される近未来の日本。検閲から本を守るために戦う【図書隊】と、唯一の【図書特殊部隊】女性隊員で主人公の郁の奮闘・恋愛模様を描いています。そして、アクションあり、ラブストーリーあり、コメディ要素あり…と小説の醍醐味が詰まっています。全6巻ですが、物語のテンポが速くいつのまにか読み終えている、そんな作品です！ 長編小説が苦手な方にはオススメの1冊です。

代表的日本人

内村鑑三【著】 岬龍一郎【訳】 PHP研究所

この本は、諸外国が日本を蔑視する傾向にあった時代に、筆者が彼らに対して「称賛に値する日本人」を紹介したものです。西郷隆盛から二宮尊徳まで、この本に紹介されている人物の共通点を通して、様々な指導者像を見ることができます。特に筆者は彼らの精神性を評価しており、指導者における「徳」の重要性を述べています。筆者自身がキリスト教徒でありながら、日蓮を強い信念の持ち主として高く評価しているのは興味深かったです。



人形の家

イブセン【著】 原千代海【訳】 岩波書店（岩波文庫）

夫に深く愛され、幸福であると感じていた主人公ノラは、ある事件を境に自分が夫にとって人形のような存在に過ぎなかったことに気がつく。愛し合うというのは、互いを男女関係なく一人の人間として尊重しあうことが大前提。相手に依存し、愛し合うとは何か分からなくなるのは現代も同じ事です。恋愛とは何か、結婚とは何か、そして人間とは何か考えさせられる一冊です。



新選組血風録

司馬遼太郎【著】 ©角川書店

あなたは新選組と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。局長・近藤勇？ 鬼の副長・土方歳三？ 薄幸の天才剣士・沖田総司？ 他にも様々な人物の名前が出てくるかもしれませんが。今までの大河ドラマや教科書でも、この3人やその他の幹部が中心に描かれていました。しかし、この本では、一般的には絶対に有名ではないであろう幹部や、新選組剣士たちの物語が描かれています。【男気あふれる新選組】というイメージが、いい意味で崩れます！ 新選組も（剣士だということを除いて）私たちが何ら変わらない個性豊かな集団だと思える1冊です！



秋のおすすめ 8冊

若きウェルテルの悩み

ゲーテ【著】 竹山道雄【訳】 岩波書店（岩波文庫）

人妻に恋してしまった若き青年の感情を、友人への手紙という形式で綴った作品です。人生や死を左右するほどの恋という激情に吞まれ、日に日に狂っていく主人公の描写には複雑な感情を覚えました。特に主人公と彼の友人が自殺について議論を行うシーンが印象に残っています。人の感情や生には理論や道徳では説明できないものがあり、それを否定することは誰にもできないのではないかと感じました。



さまよう刃

東野圭吾【著】 ©角川書店

東野圭吾といえば、ドラマでおなじみのガリレオシリーズや加賀刑事のシリーズものが出てくる人が多いでしょう。この『さまよう刃』は東野圭吾のミステリーとは一味も二味も違います。主人公は娘を少年たちに蹂躪され、殺された父親。彼は娘の復讐だけを胸に少年たちに迫っていきます。犯罪を起こした少年は法で守られていいのか——。読み終わった後もこの問いかけが胸に残ります。衝撃のラスト！ あなたならどんな選択をするのでしょうか？



居酒屋

ゾラ【著】 古賀照一【訳】 新潮社（新潮文庫）

フランス文学といえば、貴族達のきらびやかな生活や、美しい恋愛が付きもの！ しかし、この作品では、そのようなものは一切登場しません。権力に支配された庶民たちの生活をなまなましく描くことで、富や権力を搾取する貴族達を暗に非難し、大反響をもたらした問題作。これを読めば、普段のフランス文学とは一味違う醜さや狡さ、そして苦しい中で生き抜いてゆく人々の強さを味わうことが出来ます。



古代への情熱

シュリーマン【著】 池内紀【訳・解説】 小学館（地球人ライブラリー）

世界的に有名な発掘家シュリーマンの人生を、彼によって見つけ出された文明とともに記した作品です。本人が書いた発掘日記や自伝をまとめたもので、シュリーマンが幼い頃の夢を、生涯を通して求め、達成し、最期を迎えるまでの流れが書かれています。中でも特徴的なのは彼の発掘日記の部分で、発掘品や現場風景の細かい描写からシュリーマンの古代への情熱を感じる事ができます。夢にかける情熱が持つ力を教えてくれる作品だと思います。





佐々木 諭 (ささき さとし) 先生

1986年	創価大学 入学
1991年	在学中にモスクワ大学留学
1994年	創価大学大学院博士前期課程進学
1995年	同課程修了
1996年	英マンチェスター大学大学院へ進学
	開発経済を専攻
	特定非営利活動法人 AMAD 入社
	ボスニア・ヘルツェゴビナ、ルワンダ等の事務所に駐在
2000年	国際協力機構 (JICA) の専門家派遣でザンビアに。
2003年	岡山大学大学院博士課程進学
2005年	新潟大学大学院博士課程編入
2007年	同修了 (医学博士取得)
2010年	新潟大学大学院医歯学総合研究科助教
	創価大学学士課程教育機構 准教授

「中国の発展の勢いは想像以上に凄いものがある」――これは、中国とは遠く離れたアフリカのザンビア共和国での実感でした。私は、毎年春と夏の休暇期間に、国際協力機構 (JICA) のコンサルタントとして3週間ザンビアを訪ねています。中国資本のホテルや中国との合併企業の建設など、毎回訪れるたびに中国からの投資の顕著な増加に圧倒されます。

世界の中の中国の躍進は、中国留学生の数からも知ることができます。米国の国際教育研究所の統計によると、中国から米国への留学生数は2005年の6万人から2009年までの4年間に2倍の12万人をはるかに超えました¹。一方、日本の留学事情はどうかというところ、2004年から2008年の間に15%も減少し、日本の学生の内向き志向が問題視され

ています。同期間の18歳人口の減少率が約12%であることを考慮しても、日本の学生の留学志向が弱くなっているとの指摘は間違っているとはいえないでしょう²。

く機会ともなります。私自身、学生時代に交換留学生としてロシアのモスクワ大学、大学院時代には米国のカリフォルニア州立大学、大学院卒業後には英国マンチェスター大学大学院に留学しました。いずれの留学時代においても、壁にぶつかり苦しみながら乗り越えていったことを覚えています。なかでも最も高くそびえた壁が民族や文化などのアイデンティティでした。

そのような壁を描いた小説に遠藤周作の「留学」があります。「留学」は三部の短編小説からなっていますが、その中にある「爾も、また」は、フランス文学の若き研究者が文化、思想、伝統の越えられない壁に悩みぬく姿を描いています。夢と志を持ってフランスにやってきた彼が目にした同胞の日本人は、日本人のアイデンティティを持ちながらフランスの文化を貪欲に吸収しようとする人、越えられぬ歴史と文化の壁に打ち返されフランスにあつて日本人のコミュニティの中だけに自分の場所を見出す人、日本人というアイデンティティを失い根なし草のようになってしまっている人、でした。主人公は、文化の違いを対立とはとらえず、ひたすら融合しようとして試みますが、日本人のア

イデンティティを持ちフランスの文化に挑んでいた人々と同じく、遂には孤立して戸惑い病に倒れ、道半ばで帰国の途に就くことになります。作品は、一面的には遠藤周作氏の原体験から来ている西欧と東洋の葛藤と挫折とされています。グローバル化が進む現代において、アイデンティティは重層化し、決して日本人であることが唯一のアイデンティティではなくなっていますが、異国の地での葛藤と孤独は、決して遠藤氏が作品を書いた時代に限定されるものではありません。文化や伝統、民族には越えられない一線があり、その境界を認識することから始まり、いかに友情と信頼を深めあえるかに人間的な成長と本質的な意味での多様性の尊重があるのではないかと考えます。

創立者・池田先生は、ハーバード大学講演「21世紀文明と大乘仏教」において、「人の心に見がたき一本の矢が刺さっている」との釈尊の言葉を引用し、民族や文化などの壁は自らの心の中にあり、内面にある差異のこだわりを克服することの重要性を語られました³。ロシアと米国留学中に、嬉しいことに創立者の民衆も文化も超え信頼と友誼を深められる行動に、地球市民のあるべき姿を教えて頂きました。

大学研究家の山内太地氏は、「ワールド会」の活動について、「留学経験を個人だけのものにせず、在学生や受験生へのアドバイスをしている。こうした活動がある大学は非常に珍しい」と称賛していました⁴。創価大学はまさに地球市民を育成する場であり、1人でも多くの学生が留学に挑戦し、地球市民へと成長することを願っています。

1 小林明 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流』2011年5月号

2 国立社会保障・人口問題研究所 「日本の将来推計人口」

3 池田大作 「21世紀文明と大乘仏教」、レグルス文庫

4 山内太地 「世界の大学めぐり」 <http://yamauchexblog.jp/14628451/>

図書館からののお知らせ



図書館では学生の皆様に向けて各種講習会を行っています。

まずはじめに「入庫講習会」があります。学部学生の方は基本的に書庫の中に入ることが出来ません。しかし、入庫講習会に参加すれば、入庫することが出来るようになります。

他にも教員向けの「データベース講習会」を行っています。これは中央図書館が契約している各種データベースの使い方や、論文検索、文献管理ツールなどの講習会となります。

また、「卒論支援ガイダンス」「修論支援ガイダンス」といった講習会では、資料検索、学外利用の申請方法などについて取り上げます。

このほか、C E T Lによる「図書館活用力アップ講座」や「文章読解スキル講座」など各種講習会も行われています。

各種講習会の詳しい日程は図書館H PのNews & Topicsやポータルサイト、館内の掲示物等でお知らせをしております。WEBからのご利用となりますのでご注意下さい。



図書館からのお願い

最近図書館内における学生の皆様のマナーについて、「建設の声」などで、多数お声を頂いています。

グループ学習室での飲食や騒音、利用時間を過ぎても個人閲覧室（4階）やランゲージスタディールームを使用することなどが挙げられます。

また、2、3階の閲覧室は静粛ゾーンとなっています。操作音の出る電子機器（P C、電卓等）の利用は禁止されています。

多くの方が利用される空間ですので、良識ある行動をお願いいたします。

企画展示

創価大学中央図書館では学生の皆さんに、読書のきっかけになればと、趣向を凝らした企画展示を行っています。

5月には新入生を対象に、「新生活をサポート」できるよう、料理やインテリアなどの本や、創作者の著作、レポートの書き方や入門書を展示しました。

6月では「防災とエネルギー」をテーマに、大学の避難経路や取り組みなども紹介しながら、「これからのことを考える」をコンセプトに、クリーンエネルギーや原子力発電、放射能などに関する図書を集めました。

8月は珍しい装丁の図書を中心に「読むだけでなく、見て触れて楽しむ」をテーマとしました。

中央図書館のコレクションの中から巻物や革装丁、刺繍装丁などの本を取り上げました。

9月の展示では、創価大学の強みである127校45カ国・地域に広がる「留学制度」を紹介し、図書館の中から留学・語学、各国事情に関する図書を集めました。

その他、国際課やW L C (World Language Center) など、留学に関する学内機関の取り組みなどについてもご紹介しました。

これからも様々な展示を行いますので、ぜひご覧ください。

創価大学 附属図書館

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236

Tel: 042-691-3191 Fax: 042-691-9308

www.soka.ac.jp/Library/